

平成 23 年 12 月 7 日

吉備津神社の注連柱「黄薇」

丸谷憲二

1 はじめに

歴史研究会 吉備の国 岡山大会の下見に 9 月 19 日吉備津神社を訪問した。その時、吉備津神社石柱の注連柱の「黄薇」に注目した。吉備の中山を語る会会員より「**犬養木堂の書**である。宮司様に質問するように」との助言を得た。12 月 5 日に吉備津神社より教示を得た。



吉備津神社の注連柱「黄薇」

2 注連柱「黄薇」の意味

私の「黄薇砥国神武昭耀千古」と思うのですが、よくわかりませんとの質問に対して、おおよそ字は正しいのですが、一字間違っております。上から三文字目は『砥』ではありません。活字になっていない文字ですが、『啓』の俗字が書かれております。(大漢和による) (『国』も『國』となっております) ですので、「黄薇啓國神武昭耀千古」となります。

読みは「^{きび}黄薇^二 ^{くに}國^ヲ ^{ひら}啓^キ ^{じんぶ}神武^ハ ^{せんこ}千古^ニ ^{しょうよう}昭耀^ス」となります。

意味は『吉備津彦は吉備の地に國を啓かれ、その神の如く優れた高い武徳は千年の永きにわたってあきらかに輝いている。』となります。

この注連柱は、**犬養木堂翁の揮毫**になるもので、『大正五年樹』と彫られていると思います。近くの社名石柱が大正三年一月四日建立だと思えます。一度御確認いただければ幸いです。

『吉備の中山』には**蕨の伝説**があります。それは、「吉備の中山の蕨を妊婦が食べるとか**ならず男子が生まれる**というもので、皇室に皇子の誕生がなかった昭和初年、これを憂いた当時の岡山県知事篠原英太郎がこの伝説を聞き、早速、吉備の中山の中腹に一画をきめて蕨を育成し、これを皇后陛下に献上した。昭和八年、皇子の誕生となった。いまの皇太子殿下（現在の天皇陛下）である。そのときの宮内大臣の返書がいまも神社に保存されている。

ちなみに、『岡山県通史』が引用した『大成旧事本紀』によると神武天皇が東征にあたり吉備の高島宮に滞在していたときの出来事に次のような話がある。(中略)一夜にして行宮(あんぐう)の庭に一丈二尺の黄蕨(きわらび)が生えたので、瑞祥とし、国名をキビと称するにいたったというものである。もちろん伝説であるが、周知のようにキビの国は普通は「吉備」、ときには**黄蕨国**とも記すのである。現在、吉備津神社の正面に大正五年に建立された巨石の注連柱がある。それには随神の後裔といわれる犬養毅は次のように書いている。

黄蕨啓國神武昭耀千古 中山鎮地黍稷馨香四時

このようなことから吉備の中山の蕨が有名になって男児誕生の伝説が生まれたのかもしれない。」(以上「」内は岡山文庫 52 吉備津神社 藤井駿 著)

3 黄蕨の初見

永山卯三郎の『岡山県通史』は昭和5年(1930)発行である。『吉備の文字、一様ならず、日本紀に「吉備」日本紀纂疏に「寸籛(きび)」古事記に「岐備」又「黄蕨」と記し又「夜叉国、廣遠国と見ゆ。』とある。『古事記』の調査では「黄蕨」との表記は活字本では発見できなかった。しかし、書写の時代であり誤写があったのかも知れない。

岡山県立図書館蔵の国絵図に「**黄蕨中州地理図**」がある。出版者・出版年不明。岡山県立図書館は「黄蕨中州とは、備中のことである。」「宝永3年(1706)から文政12年(1829)までの間の図だと考えられる。」としている。

『岡山県地方史資料叢書第8 **黄蕨古簡集**』は、浦上宗景・宇喜多直家の書状が多く収録されており歴史研究者必読本である。本の表紙に「備前古簡集」とある。江戸後期、寛政5年(1793)に岡山藩士齋藤一興(1757~1823)によって編纂された「黄蕨古簡集」を抜き書きしたものである。**黄蕨**は江戸中期から使用されていたと推定される。

4 まとめ

日本国語大辞典では蕨「**ぜんまい**」と説明している。**黄蕨(わらび)**が**黄蕨(ぜんまい)**に変更されていることに注目したい。